

静御前

頼山陽

工藤の銅拍秩父の鼓

幕中酒も挙げて汝の舞を観る

一尺の布猶お縫う可し

況此の繰車百尺の縷をや

回波回さず阿哥の心

南山の雪終古に深し

【作者】頼山陽（一七八〇〜一八三二）（安永九年〜天保三年）・名は襄（のぼる）、字は子成（しせい）、号は山陽。大坂江戸堀に生まれた。父春水は安芸藩の儒者。七歳の時叔父杏坪について書を読み、十八歳で江戸に遊学した。二十一歳で京都に走り、脱藩の罪により幽閉される。のち各地を遊歴し、天保三年九月病のため没す。五十三歳。

著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府（がふ）」などがある

【語釈】

- *工 藤…源頼朝の家臣で工藤祐経（すけつね）。
- *銅 拍…銅拍子ともいい銅で作ったドラ。 *秩 父…源頼朝の家臣で秩父三郎。
- *幕 中…鎌倉の鶴岡八幡宮の垂れ幕の中。 *汝…義経の愛妾である静御前。
- *しずの芋環…「芋環」は麻糸を球状に巻いたもの 「しずやしずしずの芋環」は「繰る」の序詞で「繰る」を飾る役目。

*一尺之布…「史記」に「一尺之布尚可縫 一斗之粟尚可舂 兄弟二人不能相容」（一尺の布なお縫うべし 一斗の粟なおうすづくべし 兄弟二人相容るるあたわず）一尺の布でも縫い合わせることができし わずか一斗の粟でも臼でついて食べることができしに 漢の淮南〓わいなん〓・厲王〓れいおう〓兄弟は不仲であった）とあるのによる。

- *況…まして…はなおさらだ。 *回 波…もと舞曲の名 めぐり寄せる波。
- *阿 哥…兄 ここでは頼朝。 *南 山…ここでは吉野山。

【通釈】

頼朝は家臣の工藤祐経に銅拍子を、秩父三郎に鼓を打たせ、鶴岡八幡宮境内の垂れ幕の中で、杯を傾けつつ静御前の舞を悦に入れて眺めている。

（和歌）しずやしず…過去をたぐりよせて昔のことを今に蘇らせる方法がほしい。一尺の布でも衣服を縫いあわせることができるのに、まして糸車の百尺もある糸はなおさら立派な布に織ることができる。（頼朝・義経の契りの深い兄弟ならば仲良くできないことはない）（和歌）よしの山…吉野山の嶺の白雪を踏み分けて東国に行った義経のあとが恋しい。

寄せては返す波の姿が変わらないように頼朝の心を翻すことはできなかったもので、吉野山の雪が永遠に深く積もっているように、静御前の心も深い恨みから融けることはなかった。

【備考】

この詩は、頼山陽「日本楽府」66首の一つで、静御前が頼朝に呼ばれ、文治二年（一一八六）四月八日、鎌倉の鶴岡八幡宮で舞った静の心情に寄せ、頼朝と義経兄弟の不和を詠じたものである。